

一八八三年六月五日(火)

ドツキネーシヨル
南神村における聖ラーマクリシユナと信者たち

タクール、聖ラーマクリシユナが初めて神の愛に狂気の様相を呈していたころの話

〔昔話——デベンドラ・タクール(タゴール)、ディーナ・ムクルジエー、クマール・シンのこと〕

今日は新月、火曜日。キリスト暦一八八三年六月五日。聖ラーマクリシユナはカーリー神殿におられる。日曜日には信者が大ぜい集まってくるが、今日は火曜なので人が少ない。ラカールがタクールの傍にいる。ハズラーも来ていてタクールの部屋の前のペランダに坐っている。校長は先日の日曜に来て、そのままここに泊まっている。月曜の夜、カーリー殿の舞^{ナト・マディル}堂でクリシユナ劇が催された。タクールはしばらくそれを見物された。この劇は本来、日曜日に催される筈であったが、都合のためできなかったので月曜に行ったのである。

昼食のあと、タクールは神の愛に狂気していた頃のお話をして下さった。

聖ラーマクリシユナ、校長に向かつておっしゃる——

「大へんな境地を通ってきたものだよ！　ここでは食事もしなかった。この南神村^{ドツキネーシヨル}や、バラナゴルや、

エンレダ（アリアタハ）のどこかのバラモンの家の上がりこんだものさ。たいてい、食事どきも過ぎていた。上がって坐ったきり口も利かない。家の人が何を聞いてもただ、『私はここで食べる』と言うだけ。ほかに何も言わない。アラムバザールのラーム・チャトジェーの家にもよく行った。時には南神村ドゥキネーショルのチョウドリーの家にも行った。あの家でもよく食べたが、あまり美味しいとは思わなかったな。魚臭くてね！

ある日のこと、急に、デベンドラ・タゴールの家に行こう！という気になった。それでシエジョさん（マトゥール氏のこと）に、『デベンドラは神様の名を称えているから、あの人に会いたい。わたしを連れていっておくれ』とたのんだ。シエジョさんは自尊心の高い人だから、招待もされずに他人の家に行くなんてことは先ず出来ない人だろう？ はじめは気が進まない風だったが、とうとうこう言つたよ。『ああそうだ、デベンドラとはいっしょに勉強したことがある。行きましよう、お連れしますよ』（訳註、デベンドラ・タゴール——ノーベル文学賞を受賞したラビンドラナート・タゴールの父）

ある日のこと、バグバザールの橋の近くにディーナ・ムクルジェーという立派な人がいるという話を聞いた。大そう信心深い人だということだった。シエジョさんにたのんで、そのディーナ・ムクルジェーの家に連れて行ってもらった。シエジョさんたら、馬車で連れて行つた。その人の家は小さくてね、そこのでっかい馬車で大金持ちが乗りつけたわけだ。家の人たちはびっくりしてウロウロするし、わしらは具合の悪い思いをしたよ。おまけに、子供達に聖糸を授ける日だった。込み合っていて、坐る場所も見つからない。隅の方の部屋に行こうとすると、『そこには娘どもがいますから、行かな

いで下さい』と誰かが叫んだ。ほんとに困ってしまったよ。帰りしなにシエジョさんが、『パパ！もうあんたの言うことは聞かないから』って文句を言ったよ。わたしは笑い出してしまった。

ほんとに、何とも大変な境涯だった！クマール・シンが修行者を供養するというので、わたしも招待された。行ってみると修行者たちが大ぜい来ていた。わたしが坐ると、誰かれとなくわたしの身の上を訊くんだよ。こんなこと訊かれるのなら、皆と別に坐ればよかった、と思つた。人の身の上なんか訊いて何になるんだろう。それから皿代わりの葉っぱがならべられて、皆、席についたが、誰も何も言わぬうちにわたしはさっさと先に独りで食べ始めた。ほかの修行者たちは口々にささやき合っていたつけ——『アレ、あの人はどういう人だろう！』って」

ハズラーとの対話——師弟の問答

午後五時近くになった。タクールはベランダの階段の上に坐っておられる。ラカール、ハズラー、校長が傍に坐っている。ハズラーはソーハム(我はソレなり)の態度をとっている。

聖ラーマクリシュナはハズラーにおっしゃる——。

「うん、すべて輪の中だよ。あの御方が有神論者にも無神論者にもなつていらつしやるのだ。あの御方が善で、あの御方が悪なんだ。あの御方が真実で、あの御方が虚妄うそなんだ。目覚めているときも、眠っているときも、あの御方の領分だ。そしてまた、あの御方はこんな、すべての状態を超越している。

一人の農夫が、だいぶ年をとつてから男の子をもうけた。掌の中の玉のように大事に育てた。男の

子はだんだん大きくなった。ある日のこと、農夫が畑で働いていると人が来て、『坊やがひどい病氣だよ、死にかかっているよ』と知らせた。家へ帰つてみると、もう子供は死んでいた。女房はオイオイ泣いていたが、この農夫は涙一つこぼさない。女房は近所の人に向かって情けなさそうに嘆いた。『自分の子が死んだというのに、あの人は涙も出さなんでしょうよ』しばらく経ってから農夫は女房を呼びつけて、こう話した。『おれがどうして泣かないか、わかるか？ おれは昨夜、夢を見たんだよ。王様になって、七人の王子の父親だった。みんな性質もよく、かわいい子供たちだった。大きくなるにつけていよいよ賢くなり、優れた技も身につけた。その時、パッと夢が覚めたんだよ。今のおれは、お前との間にできた一人の息子のために泣いたらいいのか、あの七人の息子たちのために泣いたらいいのか、迷っているところだ』つまり、この農夫のような知者にとっては、目覚めている状態も、夢の状態と同じ程度だけ真実なんだね。

神だけが行動者だよ。あの御方の希望であらゆることが起こる」

ハズラー「でも、それを理解するのは大変な努力がいりますね。あのブーカイラースの修行者を、周囲の人はどれだけ酷い目に遭わせたことか、言わば殺したようなものですよ。修行者が三昧サムライに入っているのを見ると、土の中に埋めたり、水に漬けたり、焼きゴテを当てたりしたでしょう？ あんなことをして意識をとり戻させようとしたんです。でも、この責め苦のためにとうとう彼は死んでしまいました。人々が責め殺したのに、それでも神の希望で死んだとおっしゃるのですか！」

〔悪の問題と魂の不滅 (Problem of Evil and the Immortality of the Soul)〕

聖ラーマクリシュナ「自分で蒔いた種は、自分で刈りとらなけりやならん。でも神の希望で、あの修行者は肉体を棄てたんだよ。カヴィラージ(インドの伝統医学アーユルヴェーダの医者)たちは瓶のなかでマカラドヴァジャ(金を触媒とし水銀と硫黄でつくるインドの薬)を調合する。瓶を粘土でつつんで火の中に入れる。瓶の中の金が火の熱で他の材料とまじってマカラドヴァジャになる。するとカヴィラージは瓶を取り出して、ゆっくりと壊して、中の薬を取り出す。中のものが出来上がってしまえば、瓶はもうあつてもなくても、どうということはないだろう? それと同じことで、人はその修行者が殺されたと思うだろうが、彼の中のものは、きっと出来上がっていたにちがいないよ。至聖をつかんでしまえば、この肉体が生きていようがなくなってしまうが、ちつとも構わないだろう?」

〔修行者と神の化身のちがひ〕

「ブーカイラスの修行者は三昧に入っていた。三昧にはいろいろ種類があつてね、リシケシの修行者の話はわたしの様子とそっくりだ。体のなかに蟻がしのびこむように靈氣が流れてくる。時にはヒラリ、ヒラリと猿が枝から枝にとび移るように感じることもあるし、魚が泳いでいるように感じることもある。経験してみないとわからないがね。外の世界のこととは忘れてしまう。心がちよつと下りてくると言うんだ——『大実母! わたしをなおしておくれ、わたしは口が利きたいよ』と。

神の分身たち以外は、三昧から戻ってこれないのだ。人間は一生懸命修行して三昧状態になるこ

とはできるが、もう戻ってこれられないのだ。あの御方が自ら人間となつてこの世にいらつしやつた場合、つまり神の化身として、人間の解脱の鍵を手にもつてこられた場合は、三昧の後でこの世の意識にお戻りになる。人々の幸福のためにね」(訳註——神の分身は神の化身の一部をもつて生まれた人たち)

校長は内心で、タクルのお手には解脱の鍵があるにちがいない、と思つた。

ハズラー「神をよろこばせさえすればそれです。神の化身など、おいでになろうとなるま
いと——」

聖ラーマクリシュナ、破顔一笑して、

「はい、はい。ヴィシユヌブルに大きな登記所があるから、あそこへ登記しておいてもらえば、
誰にも文句はつけられないよ」

〔師と弟子の対話——自ら語られるタクルの生涯〕

今日は火曜日で新月、夕方になつた。神殿では献灯が始まつている。十二のシヴァ堂、ラーダーカー
ンタ堂、およびバヴァタリニー堂(カーリー堂)ではほら貝や鈴が人々の幸福を祈つて鳴らされている。
献灯が終わつてしばらくすると、タクル、聖ラーマクリシュナは自室から南のペランダに出てお坐
りになつた。辺りは深い闇につつまれて、ただ神殿のどころにランプがまたたいている。ガン
ジスの河面に空の黒々とした影がおちている。タクルは、新月にはいつも霊のよろこびに浸つてお
られるが、今日はまた一段と強いようである。時々、^マオームと大実母の名を称えていらつしやる。

夏なので、お部屋のなかは非常に蒸し暑い。だから、ベランダに出ていらつしやるのだ。信者の一人が差し上げた美しい模様の手拭をベランダに広げて、その上で昼夜を問わず大実母に念じていらつしやるのだ。やがて横になられて、ヒソヒソとした声でモニと話をしておられる。

聖ラーマクリシュナ「ね、神様は見えるんだよ！ 誰それも見ただよ。これは誰にも話しちゃいけないよ。そうだ、お前は形のある方より、無相の实在かみというのが好きなんだろ？」

モニ「はあ、いまのところ、無相の實在のほうがやや私に向いているようです。でも、だんだんその無相の御方がすべての人格神となっているのだ、ということがわかりかけてきました」

聖ラーマクリシュナ「なあ、ベルガリヤのマティ・シールの湖に馬車で連れて行ってくれないか。あの湖に揚げ米を投げやると、魚がみんな寄ってきて食べるんだよ。アハー！ 魚の群れがスイスイ泳ぎまわっているのを見ると、しんから楽しくなる。お前も、サッチダーナンダの海に、真我アイトマンという魚が自由自在に泳いでいるのを思い出すだろう。それに、うんと広い野原に立っていると、神様への想いでいっぱいになる。鉢の中の魚が放されたようなものだ。

あの御方に会うためには、どうしても修行が必要だ。わたしは、ずい分苦しい修行をしなければならなかったよ。ベルの樹の下で、どれだけいろんな修行をしたことか。木の根にしがみついて、『大実母よ、姿を見せておくれ』と言って、どんなに涙を流したことか！」

モニ「あなた様でさえそんなに修行をなさったのに、ほかの人間が僅かの間で悟れるはずがございませんね？ 家のぐるりに指で輪を描いただけで、掘が出来上がるわけではありませんからね？」

聖ラーマクリシュナ「ハハハハハ。アムリタは言っているよ——『一人が火を燃やせば十人が暖まる』と。それから、『永遠を手に入れて、リーラーの世界に住むのは結構なことだ』と」

モニ「あなた様は、この変化の世界は楽しむためにあるとおっしゃいますが——」

聖ラーマクリシュナ「いや、リーラーも真実だ。それからね、ここへ来るときは少し何か手みやげを持っておいで。自分から言うのはえはっているみたいで感心しないんだがね。アダル・センにも、何か一パイイス（インドの銅貨）くらいものを持ってくるように言ったよ。バヴァナートにはキンマを一パイイス持つてくるように言った。ところで、バヴァナートの信仰ぶりに気がつかっているかい？ ナレンドラとバヴァナート——まるで男と女の対みだ。バヴァナートはナレンドラの言うがままだ。ナレンドラを馬車にのせて連れてきてくれ、何か食べ物を持って。そうすることが、大そうお前のためになるよ」

〔智慧の道と無神論、哲学と懐疑論 (Philosophy and Scepticism)〕

聖ラーマクリシュナ「智慧も信仰も、二つとも道だ。信仰の道では、(智慧の道よりも)形の上での精進をよけいしなければならぬ。智慧の道では形式を少々破つても、さして本人にひびかないものだ。燃えさかる火の中では、バナナの樹だつてたちまち灰になるからね。」

智慧の道は分別の道だ。分別判断をし続けていると、時には無神論者になってしまうことがある。信仰者は心底から神を知りたいと希つているから、すこし位無神論の影響を受けても神の想いから離

れない。祖父^{じい}さんの代からの百姓は、干ばつで作物がとれない年でも、畑^{じい}仕事^いがやめられないからね！」
タクルは枕の上に頭をのせて、横になって話していらつしやる。「脚がだるいから、ちよつと手でさすっておくれでないか」とモニにおつしやつた。際なき慈愛の大海、尊師の蓮の御足をさすりながら、彼は聖なる御口からヴェーダの響きを拝聴していたのであつた。